天才ハッカー「闇のダンテ」の伝説

ジョナサン・リットマン

桑原透［訳］

文藝春秋

天才ハッカー「闇のダンディ」の伝説

ジョナサン・リットマン
桑原透[訳]

江苏工业学院图书馆
藏书章

文藝春秋

THE WATCHMAN
BY JONATHAN LITTMAN
COPYRIGHT ©1997 BY JONATHAN LITTMAN
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEI SHUNJU LTD.
BY ARRANGEMENT WITH LITTLE, BROWN AND COMPANY(INC.), BOSTON
THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO
PRINTED IN JAPAN

天才ハッカー「闇のダンテ」の伝説

一九九七年一一月二〇日第一刷

著者　ジョナサン・リットマン

訳者　桑原透

発行者　新井信

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―一三　郵102

電話＝〇三―三二六五―一二一一

印刷所　大日本印刷

製本所　大口製本

万一落丁乱丁があれば送料当社負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送りください。

定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-16-353540-3

シェリー・ルーとエリザベス・クレアに

目次

プロローグ　7

第一章　天才の誕生――15

夢は最強のハッカー　16
「闇のダンテ」の登場　31
ゲームしませんか？　41
世界のトップ・ニュース　51
よき相棒　59

第二章　孤独なヒーローの冒険――67

天国のような職場　68
スター・ウォッチング　82
変身願望　92
核戦争の模擬訓練　104
本社ビルへの侵入　116
ウォッチマン　122

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「新世代」の出現　134
第三章　アメリカ政府を敵として
貸しロッカーの謎　144
家宅捜索　155
大いなる野望　166
新しい仲間　176
盗聴自由自在　189
二人の闖入者　199
危ないビジネス　208
管理爆破宣言　222
FBI動く　237
驚愕の新発見　249
「影の戦士」への警告　262
大陪審　274
危険な関係　284
極秘の逮捕令状　292

三十七年間の懲役　312
八台目のポルシェ　323
あわやの大ピンチ　335
空港からの大捜査網　347
人気番組つぶし　362
追いつ追われつ　378
大胆不敵な行動　386
あっけない幕切れ　400
エピローグ　411
著者あとがき　433
訳者あとがき　437

天才ハッカー「闇のダンテ」の伝説

Cover Photo Courtesy Kevin Poulsen
Cover Design Kentaro Ishizaki

プロローグ

今日は彼自身がそれをものにする日だ。何台かある自分のぼろ車のうちから一台を選び、エンジンをかける。ひときわおんぼろの軍用輸送バンだ。ハリウッド大通りの東を走る。小切手換金屋、ほこりまみれのもぐり屋台、手相屋などが密集している一帯や往年の映画スターの名前を塗り込んだ歩道を過ぎる。夏のスモッグが厚く垂れ込めている。ロサンゼルスの朝の光景だ。いつもならこの時間帯には彼はたいてい眠っている。彼が活動するのは夜だ。もっとも、彼がどうやって生計を営んでいるのか他人の知ったことではないが、今日は違う。普段の生活リズムとは違うのだ。夜が朝に変身するころ、彼はもがき苦しみながらベッドを這い出て、スタイルを決めるべくプラチナ色に染めあげた髪を除いて全身を黒にまとめた。だぶだぶの黒のジーンズに黒のリーボック・シューズを履き、メルローズ通りで流行っている黒のボーリングシャツ、そして左耳にダイヤのピアスをつけた。細面にきゃしゃな体つき、それに長めの鼻。だが、目つきは違う。その目はこれ以上ないほどの輝きを放っていた。

お気に入りのポップ歌手の歌を聞きながら、もう一杯コーヒーを飲もうか迷っていたとき、歌がやんだ。「今日がその日だ！」ディスクジョッキー（DJ）のリック・ディーズが叫んだ。「ま

ず第一曲目はジャネット・ジャクソンの『エスカペイド』だ。そのあとにB-52Sの『ラヴ・シャック』とプリンスの『キス』が続いたら、102に電話してね。五万ドルもするおニューのポルシェがきみに当たるかもしれないんだぜ！」

ロサンゼルスの歴史が始まって以来の最高賞品が当たるラジオ番組が、いまやクライマックスを迎えようとしている。一九九〇年六月一日金曜日。今日がその途方もないコンテストの最終日だ。七週間ぶっ続けで週に一度、KIIS-FM一〇二局は南カリフォルニアの夢を代表する鋼鉄の入れ物と革張りの室内とステータスをひとまとめにしたものを気前よく配っていた。だれもがその夢に熱狂し、それなしにはロサンゼルスに住んだり、働いたりできないほどだった。まぶしく輝く何台かの真っ赤なオープン・カーのポスターが市街のほとんどの看板やバスの車体を埋めつくしている。あらゆるところでラジオが付けっぱなしにされている。車の中、ショッピングモール、仕事場、レストラン、家庭、どこでもだ。

ビジネスマン、主婦、銀行家、学生、うだつのあがらない俳優、クイズマニアたちが携帯電話やキャッチホン付きの電話から、それにふつうのダイヤル電話からも先を争うように局の受付にかけていた。狂乱、電話機具、スピード・カー、どれをとってもアメリカ人の好きなものばかりだ。だれもがすべてに平等な扱いを受けているわけではないし、同じ特権を享受しているわけでもない。だが、運をつかむチャンスだけはだれに対しても公平だ。そんなことは子どもにも分かる単純な理屈だ。「プリンス」が歌い終えたときに百二番目の電話のかけ手にさえなれば、新型のポルシェ944S2カブリオレに乗って家まで帰れるのだ。

彼は五分後にはしかるべきものを受け取り、それをかっ飛ばして、この人だかりのする広い通りの信号を抜けて、それで終わりだと思っている。歌はあと五分以上は流れているだろうが、も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

し相棒がいつものように遅刻でもしたら勝負はかなりきわどい。彼はカフエンガ大通りにある有名なインターナショナル・ニューズスタンドあたりのきついカーブを右に折れ、カサノバズ・アダルト・ワールドの隣にある目立たない戸口に向かって通りを突っ切り、赤っぽい木の階段を駆け上がった。だが、ラジオから流れる曲を耳にして急ぐのをやめた。うすうす気づいてはいたが、ディスクジョッキーがリスナーをからかっていたのだ。二曲目はB－52Sの『ラヴ・シャック』ではなかった。

だが、もうすぐ終わる。ケビン・リー・ポールスンは、希望に胸を膨らませている何十万人だかのロサンゼルス市民と違って、その日が終わる前から彼が幸運な勝者になることを知っている。彼は常々賞品のポルシェがほしくてたまらなかったが、それは車が五万ドルもするからという理由ではない。彼はコンピュータ・ハッカーであり、フリーク（電話を無料でかけられるように改造する人）なのだ。アクセスはケビンのゲームである。彼はよた連中ならだれでも知りたがる秘密を知っている。しかもそれは外国政府が喜んで金を払うほどの秘密であり、合衆国民に実害を与えるほどの秘密なのだ。コンピュータ・ネットワークと電話交換機による変幻自在（フラクタル）な世界にのめり込めば込むほど、アクセスが自分を変身させてゆくのを彼は知っている。それは神学校がひとりの若者を変身させたり、軍隊が新兵を変身させるのと似ていた。

ＦＢＩ（連邦捜査局）はケビンのことを分かっていない。ケビンは自分のしていることを彼らから非難される筋合いはないといつも思っているが、彼らはケビンの仕事や生活を奪い取っては、犯罪者の烙印をこっちに押しつけてくる。このコンピュータのご時世にあって、ＦＢＩの連中こそ自由とプライバシーの真の脅迫者だとケビンは思っている。それは連中がハッカーに対して仕かけることをすぐ一般市民にも適用しようとするからだ。だが、そんなことはケビンが描いてい

た設計図には通用しない話だ。もう一度コンピュータ侵入（ハッキング）をやるんだ。そうすれば彼は闇の世界で語り継がれる人物になれるのだ。

ＦＢＩの連中がコンピュータ侵入行為はすべて金目当てと考えているのに対して、ケビンはそれは挑戦だと思っている。賞品総額五十万ドルのラジオコンテストが一台のパソコンといくつかの電話機具、それにひとりのハッカーの才覚で仕切られてしまうなどとだれが信じるだろう？ケビン・ポールスンという芸術家の、最高のパフォーマンスがいままさに始まろうとしている。

リスクは筋書のたかだか一部にすぎない。今日こそ彼は全能のコンピュータ・システムが裸の王さまであることを証明してやるつもりだ。ケビンは自分と同種族のために立ち上がる。ハッカーとフリークが絶滅の危機にさらされているのだ。ケビンが、独創的で反抗精神旺盛な先輩たちからハイテク革命の再出発を要請された人物であったとしても、そんなことは問題ではない。ここ数カ月の間、米国諜報機関と州法の強制力によってカリフォルニアのあちこちで多くのハッカーたちが急襲されていた。新たな「電子的脅威」の阻止を掲げる彼らのせいで、全国規模で逮捕者が出たり、多数のコンピュータが差し押さえの憂き目にあっていたのだ。治安当局が「サンデビル」と呼ぶその作戦は、たちまちハッカー弾圧強化措置として知れわたった。ＦＢＩの連中からすればハッカーは無法者であり、別世界に生きるデジタルおたくたちなのだ。

ケビンは電子エリートクラブの中でも異色の人物だ。ハッキングもやれば、フリーキング（電話への侵入）もする。また壁をよじ登って、鍵をこじ開けたりもするのだ。ケビンは十三歳のときからマーベル社（AT&T＝米国電信電話会社の傘下にかつてあった各地のベル・テレホン社の愛称）の企業秘密を取得し、二度ばかり当局の手入れを受けていた。やがて彼の存在は「未解決の謎」というテレビ番組で大きく取り上げられることになる。

いま彼は二十四歳。そして、このラジオコンテストは彼にとってその天才性を披露する場であった。パク・ベル社（パシフィック・ベル社 西海岸の大手電話会社）のコンピュータに侵入して、会社通路の奥にある電話収納庫の通称「土左衛門」と呼ばれる未使用の電話回線のうち十本ほどをハリウッドにある自分のオフィスに引き込むのだ。通常は、ラジオ局の八本ある電話回線のうち一本をパクるのには二本の電話回線を必要とした。ふつうは単に四分の一から二分の一までパクリの確率をアップさせればよかった。今日はまだチャンスがめぐってきていない。

一週間前、ケビンはパク・ベル社のコンピュータ・システムをハッキングして、ラジオ局にかかってくる電話がハリウッドの彼のオフィスの電話に転送されるよう細工しておいた。そうしておいてから転送コマンド72#をプッシュし、ラジオ局の本来の電話番号を入力した。ケビンがいったん電話を切ると、ループ転送は完璧に仕上がっていた。どんなコンテスト参加電話もまず彼のコントロールした番号にかかってきて、それから局へと転送される。いったんコントロール電話がコンテスト参加電話の呼出しを受け付けると、それをいつでも局に転送してくれるのを見て、ケビンはループ転送が機能していることを確信した。

この仕かけはうまくできているが、基本的には単純な仕組みである。ロバート・レッドフォードとポール・ニューマンのあのカッコいい映画をそっくりまねたような手口なのだ。ケビンは昔からのハッカー仲間、ロン・オースティンに助っ人を求めた。いくら伝説的なハッカーといえどもひとりで八台の電話を操るのはむりだからだ。櫛も入れてないくすんだ金髪にダサいジーンズとTシャツ姿の毛むくじゃらのロンはケビンと好対照の男だ。顎のがっしりした、締まった体つきの色男ロンは自分でもそれを意識している。

でも、ロンは大まじめな青年だ。それにKIIS-FMが大嫌いだ。ロンはこの局が何度も繰

り返し流しているポップスをいやというほど耳にしていたし、それにケビンが彼の神経をいらいらさせる。ケビンがいきなり振り向いて、まじめくさった声で「ちょっと待って！　M・C・ハマーの時間だから！」ということがいくどもあった。

M・C・ハマーのラップ曲『ユー・キャント・タッチ・ジス』の歌詞がケビンの頭にこびりついて離れない。それに閉所恐怖症が身を締めつけている。二人とも息の詰まる部屋から二度と脱出できないような感覚と、一時的にせよ建物を離れるのはやばいという感じの両方がある。腹ぺこになってくると、彼らは角っこにあるハンバーガー・ショップ「ジャック・イン・ザ・ボックス」目がけて一目散に駆けだす。そんなときでも、ジャネット・ジャクソンの曲がかかりだしたら、いつでも戻れるようにラジオを小わきに抱えている。二人はぼろ布のような茶のカーペットの向こう側にマグカップを置いて、使い古しのパターで一個のゴルフボールを交互に打っている。ロンがパターを渡しても、ケビンはすぐにボールを壁にぶちあててしまう。部屋はミニゴルフ場と化していた。

■

ケビンがゴルフボールを壁にこつこつ当てていたとき、最初の曲の歌詞が聞こえた。

「微笑みながら……恥ずかしそうにして……わたしの視線はあなたにくぎ付け……」

二番目の歌はどうした？

「ぼくはアトランティック・ハイウェーを南に向かっている……」

ひょっとして？

「そんなにすてきにならないで、ぼくはもう夢中なんだから……」

やっといつものプリンスの泣き節が始まった！　歌が終われば電話のラッシュだ。

「二番目に電話した人……、五番目の人……、七番目……、九番目！」ラジオ局の係員たちが叫んでいる。

ケビンのコントロール電話が悲鳴をあげている。だが、彼は呼出し回数を辛抱強く数えた。局の回線をあまり早く取り上げると怪しまれるからだ。呼出しが五十番目になったとき、彼は受話器を取り上げ、72#をプッシュして、転送コマンドを切った。こうすればまずだれが電話してきても、ラジオ局の電話回線は通話中のはずだ。ケビン・ポールスンを除けばどの電話も「お話し中」なのだ。

かかってくる電話の半分ほどはそのままスピーカーホンにしておく。電話をそんなに数多くだまし切れるとは思えないからだ。いまは反応とタイミングをうかがっているところだ。電話をかけている連中が自分の電話番号を叫んでいる声をじっと聞いている。それから受話器を置いて回線を切る。リダイヤルの必要はない。ケビンはすでにパク・ベル社のコンピュータ・システムに侵入して、プログラム修正しておいたので、電話はラジオ局に瞬時に接続されるのだ。

ケビンとロンはインチキ賭博専門のニューヨークの二人組ハスラーのように、電話の交換機フックをカチッとオンにする。二人は自分たちが順番を待つ身であるのも忘れて、その電子操作に夢中になっていた。全部で四十万ドルにもなるKIIS-FMの賞品ポルシェの当たる番組で、最後の八台目の真紅の車がいままさに彼に授与されようとしている。だが、電話待ちの順番が九十番目になろうとするとき、もういちど難関が待ち受けている。DJのディーズが最後の二人のかけ手よりひとりでも多くの人を紹介してしまったら、彼は電話の声がいつも同じ二人の若者であることに気づくにちがいない。

ラジオコンテストを不正操作したくらいで捕まるなんてケビン・ポールスンはまるで思っていない。だが、他の重大犯罪とは別の意味で彼の名前はＦＢＩの最重要指名手配書に載る一歩手前まできていた。ＦＢＩの連中は「やつはやっちゃならないことをやったのさ」という。「国家機密の盗聴と安全管理された軍用コンピュータの破壊、つまり電話盗聴とコンピュータ詐欺をやってしまったのさ」

ＦＢＩは三十七年間ケビンを刑務所に放り込んでおきたいと思っている。しかし、そうするためにはまず彼を捕まえねばならない。ケビン・ポールスンは、サイバーパンクの夢を生きる最初のハッカーであり、国家正義の対極にある闇の世界を選んだ最初の人物なのだ。

ロンがケビンの目の前に受話器を突き出している。

電話口の向こうではロサンゼルスの電波網に乗って、ディーズの野太いめりはりのある声が響いていた。

「こちらＫＩＩＳ。きみが当選だ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.